

氏 名 (国 籍)	ちん 陳	てん 天	じ 璽 (無 国 籍)
学 位 の 種 類	博 士 (国際政治経済学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 2443 号		
学位授与年月日	平成 12 年 5 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	国際政治経済学研究科		
学 位 論 文 題 目	華商ネットワークとアイデンティティ		
主 査	筑波大学教授	博士 (法学)	波多野 澄 雄
副 査	筑波大学教授	修士 (経済学)	今 岡 日出紀
副 査	筑波大学教授	修士 (文学)	綾 部 裕 子
副 査	筑波大学教授 (併任)	P h . D . (政治学)	井 尻 秀 憲
副 査	静岡大学助教授	博士 (文学)	前 川 啓 治

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、一般にアジア経済運営の影の主役といわれる華僑・華人と、彼らが有する「華人ネットワーク」を、より新しい視点から「華商ネットワーク」として捉え直し、その実体とダイナミズムを明らかにしようとする研究である。

本論文は、従来の華僑・華人論や関連研究のように、「華人ネットワーク」を確固とした実在するものと捉えるのではなく、華僑・華人のなかで、ビジネス活動などをグローバルに展開するものを「華商」と呼んで区別し、彼らを主たる研究対象としている。また、本論文は、華商が有するあらゆる繋がりを捉え、そうした繋がりが形成される要因となっている彼らのアイデンティティの特徴をも浮き彫りにしている。これによって本論文は、華商が有する多種多様なネットワークとアイデンティティの実体を、著者が独自に編み出した“虹のメタファー”の概念（自然現象としての虹が七つの色層を形成し、観察者の視点や光の角度によって様々な形と色を映し出す性質に準えている）によって明らかにしている。

すなわち著者は、華商が有する排他的なネットワークは元来、華商によって意図的に形成されたのではなく、そうしたネットワークはむしろ自然発生的なものであり、しかも、外部の観察者の視座によって様相を変え、特異なダイナミズムを有する「華商ネットワーク」として認識されることになったとする。加えて、外部の観察者はこれまで、主に「中華」を「世界」としながら、その内側に広がる「世界」を分析することによって、そこでの排他的な相互扶助関係を「華人ネットワーク」としたが、これは、華僑・華人をめぐる、いわば狭義の（＝内向きの）世界観を基にした見方である。しかしながら、世界各地に散財し、国境を越えて活動する多くの華商にとっては、グローバル社会こそが「世界」であり、彼らは、広義の（＝外向きの）世界観を有しているのである。本論文は、以上のような斬新な仮説を提起し、それを各章において実証している。

まず、第一章では、歴史学や社会学と文化人類学、政治経済学など異なるデシプリンにおける関連理論を整理しながら、本論文で頻繁に使用されるネットワーク、アイデンティティ、華商などの用語の概念化と定義づけをおこなっている。

そこでは、これまでの研究が、共通の理論を基礎としないままネットワークという用語を引用したり、アイデンティティという用語を掲げていても、厳密な分析枠組が提示されていない点などを指摘している。また、こ

した先行研究が、華僑・華人のなかでも、特にビジネスに従事している企業家や資本家である華商を対象としているにも拘わらず、華僑・華人をもって華商の代替語とするなど、用語上の混乱が存在し、実体とは異なる理解がなされていることに注意を促している。

次に第二章では、アヘン戦争以降の中国系移民の移住の歴史とともに、彼らを取り巻く国際環境に着目し、そのなかで華商のネットワークとアイデンティティがいかに変遷してきたかを分析している。そこでは、華商のネットワークが、意図的に形成されたのではなく、移民当初、居住国における相互扶助の生活のなかで、自然発生的に形成されたものであるという前記の仮説を実証している。

第三章では、華商に影響を与えたマクロな環境に着目している。世界に点在する華商と彼らが有する世界観を理解するために必要なグローバリゼーションと脱国家的なディアスポラ（民族集団）という二つの比較的新しい概念を取り上げ、華商ディアスポラが、時にはグローバル市民として、またある時には潜在的な部外者であるという、相反する両面を同時に有していることを指摘し、既述のような華商の「内向き・外向き」の性格を有するという仮説を実証している。

続く第四章では、前章とは対照的にミクロな視点に立って、華商が有する倫理精神と世界観に着目している。彼らが信用や関係を重視するのは、彼らが有する儒教などの倫理精神に由来するものであること、華商の相互扶助関係は、外部の観察者がそれをネットワークと見なした結果、そのように理解されることとなったのであり、華商が意図的にネットワークを形成してきたのではないこと等の仮説を検証している。また、著者が東南アジアでおこなったアンケート調査を通して、専ら華商間でビジネスをおこなうのは、相互扶助関係の活用が有効という便宜上の理由であることも指摘されている。

第五章では、著者が、香港、日本、北米をはじめとする各地においておこなったフィールドワークと華商にたいするインタビューを通して明らかとなった華商のネットワークとアイデンティティの実体を浮き彫りにしている。ここでは、個人、組織、インターネット・ネットワークという三つのレベルで活動を展開し、彼らは虹のメタファーに従えば七つの多重なアイデンティティを有しており、時と場合によって異なったアイデンティティを無意識の内に操作し、華商以外の者とも繋がりを持っていることが明らかにされている。

さらに第六章では、華商を取り巻く社会のネガティブな反応に目を向け、華商が華商であるがゆえに有する脆弱性を、東南アジアの排華運動を例証として分析している。そこでは、社会が華商にたいして抱く嫉妬心、華人社会内部に存在する分裂意識など、これまでの研究では見落とされてきた点を明らかにしている。

終章では、各章の分析を総合し、著者が提示する“虹のメタファー”概念と照らし合わせながら、華商のネットワークのダイナミックスとアイデンティティの多重性を改めて指摘し、仮説の有効性を主張している。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、従来の華僑・華人論とは異なる新しい視点から華商のネットワークとアイデンティティの実体とダイナミズムを析出した研究である。新しい視点とは、前記の要旨において仮説として示したように、華商のネットワークは、自然発生的で無意識のうちに形成されたものであり、その存在は外部者の観察と認識に専ら由来するというものである。もう一つは、従来の華僑・華人研究が「中華世界」の内部に相互扶助関係を見だし、そうした内向きの繋がりを「華人ネットワーク」としてきたのに対し、華商は、世界に散財しながらグローバル社会という外向きの「世界」において各種の相互扶助的なネットワークを活用するというものである。

本論文はさらに、著者が自ら編み出した「虹のメタファー」概念を用いて、多重性を有する華商のネットワークとアイデンティティの実体を明らかにしており、その独創性は、高く評価できるものである。

加えて本論文は、世界に点在する華商をグローバリゼーションとディアスポラという新しい概念を組み合わせることによって、華商ネットワークとアイデンティティの実体を動態的にとらえることに成功している。

本論文はまた、マックス・ウェーバーや杜維明などの研究を通して、華商が有する倫理精神や世界観を明らかにし、学問分野としては、歴史学、社会学、文化人類学、国際政治経済学などに跨る学際的な方法論を駆使して、華商を分析する際に必要な理論上の概念化と新しい視点を提示し、華商ネットワークとアイデンティティの本質に迫る分析をおこなっている。

著者はまた、東南アジア地域の華商を対象として大量のアンケート調査をおこない、香港、日本、アメリカ、カナダにおいてフィールド・ワークとインタビューを精力的に実施するなど、本研究の実証性を高めるための作業を多角的にすすめている。これらの成果は本論の各章に良く生かされており、華商のネットワークとアイデンティティに関する斬新な分析視角を説得力あるものとしている。

総じて本論文は、その学際性ゆえに、方法論上の改善を必要とする点もあり、また分析の深みという点において若干の物足りなさが残るものの、華人・華商論に関する研究を新たな段階に引き上げたものであり、その学術的貢献は極めて大きく、さらに、エスニシティ論やアイデンティティ論の発展にも貢献する国際的にも注目すべき成果といえよう。

よって、著者は博士（国際政治経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。